りそな総合研究所
RESONA

ショートコメント vol.420（2026 年 11 月 6 日）

テーマ：歴史的な高水準が続くエンゲル係数
～低所得層だけでなく、むしろ高所得層での上昇が目立つ～

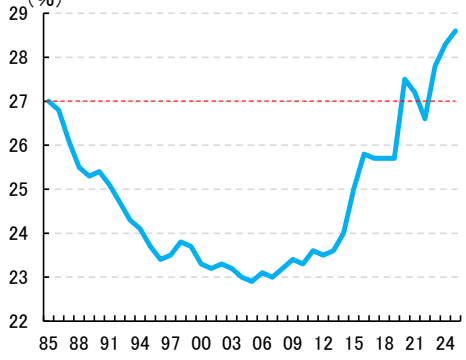
●上昇が続くエンゲル係数

エンゲル係数（2 人以上の世帯）が歴史的な水準に上昇している（図表 1）。エンゲル係数とは消費全体に占める食費の割合であり、この水準の推移をみることで、家計の実態や余裕の有無などを判断できる。

25 年は 28.6 と 85 年の水準（27.0）を大きく上回った。係数は長期的な低下の後、2007 年頃から上昇傾向に転じ、特に 20 年以降は上昇ペースが速まっている。

これは食料品価格の上昇による家計の圧迫を示すものとして、大きな懸念につながっている。特に、その懸念は低所得者で大きいとの推測から、改めて支援の必要性などが指摘されている。

【図表 1】 エンゲル係数の推移（全国）



（出所）総務省「家計調査」、二人以上の世帯

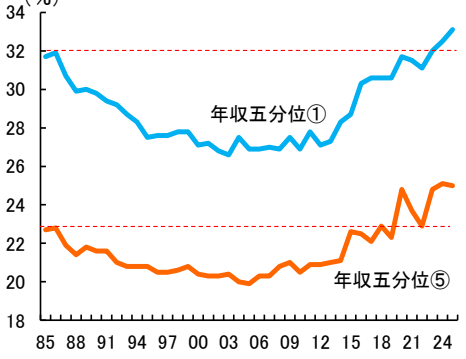
●所得階層別の推移

ただし、所得階級に分けてエンゲル係数の推移をみた場合、上昇傾向が目立つのは必ずしも低所得者だけではない（図表 2）。

たとえば全世帯を 5 等分した所得五分位階級別にみると、もちろん低所得者（年収五分位①）でも係数は上昇しているが、歴史的な水準という意味では、むしろ高所得者（年収五分位⑤）の方が上昇は目立つ。

エンゲル係数は、食費を消費全体で除したものであり、その上昇は食費の増加か、消費の減少によってもたらされる。そこで消費全体と食費の推移をみると、急増する食費に対し、消費全体は大きく増えていないことが分かる（図表 3）。つまり、エンゲル係数の上昇要因としては、食費の急増と、消費全体の鈍さの両方ということになろう。

【図表 2】 エンゲル係数の推移（所得階級別）

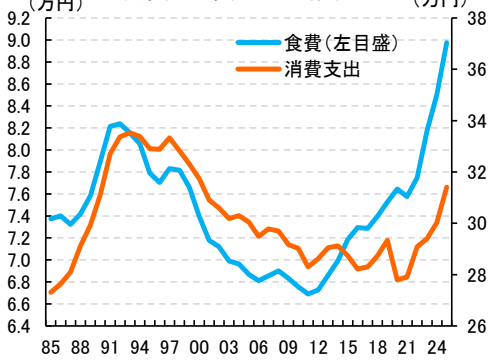


●可処分所得と消費性向の推移

この「消費の停滞」と「食費の増加」という状況からは、家計の厳しい実態により消費が鈍化する一方、食料品価格の上昇には抗えず、食費が増えている様子が浮かび上がる。こうした連想は、低所得者を中心とした苦境を説明するものとして分かりやすいが、高所得者層に当てはめるには、やや違和感がある。

そこで注目されるのは、直近の可処分所得と消費性向の関係である。消費性向とは、可処分所得のうち、消費に回され

【図表 5】 食費と消費支出の推移



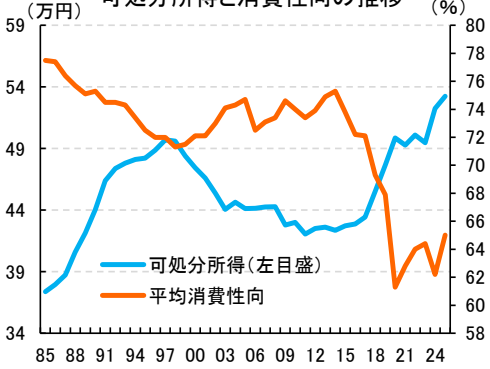
※本稿は情報提供が目的であり、商品取引を勧誘するものではありません。また、本稿は当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。なお、本稿に記載された内容は執筆時点でのものであり、今後予告なしに変更されることがあります。

る比率を指す。直近の両者の推移をみると、可処分所得が増える一方で、消費性向は低下している（図表 4）。

一般的に、所得の増加局面では消費性向は上がりにくい（所得の増加分ほど消費は増えない）ため、その影響は否定できないが、気になるのは消費性向の低さであろう。2010 年代後半に大きく下がったまま、上がる気配がない。

まして、近年は物価上昇が進む中、それに連動した消費の増加があれば、消費性向も上昇してしかるべきであるが、その動きがみられない点が気掛かりである。

【図表 4】 可処分所得と消費性向の推移



●家計による消費停滞の背景

この傾向が高所得者でも強いために、結果としてエンゲル係数の上昇につながったとみられる。

家計の消費性向が上がらない、つまり消費全体が増えない要因としては、やはり所得の先行き不安が挙げられよう。物価の上昇が続く中、それに伴う所得の上昇が見込めなければ、消費を増やす意識ははたらきにくい。一定以上の所得層であっても、今後の賃上げやボーナスの増加は約束されたものではない以上、支出の増加には慎重になりやすいとみられる。

ここまでみてきた動きから、近年のエンゲル係数の上昇は、食品価格の高騰による食費の増加だけが要因ではない。消費全体の停滞による影響も大きく、その要因には、所得不安による消費性向の上がりにくさが挙げられる点につき、認識しておきたい。

本件照会先：大阪本社 荒木秀之
TEL: 06-7668-8805　mail：hd-araki@rri.co.jp

※本稿は情報提供が目的であり、商品取引を勧誘するものではありません。また、本稿は当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。なお、本稿に記載された内容は執筆時点でのものであり、今後予告なしに変更されることがあります。